

2026年1月20日（*本資料は講義メモのため引用・転載不可）

副所長定例講座

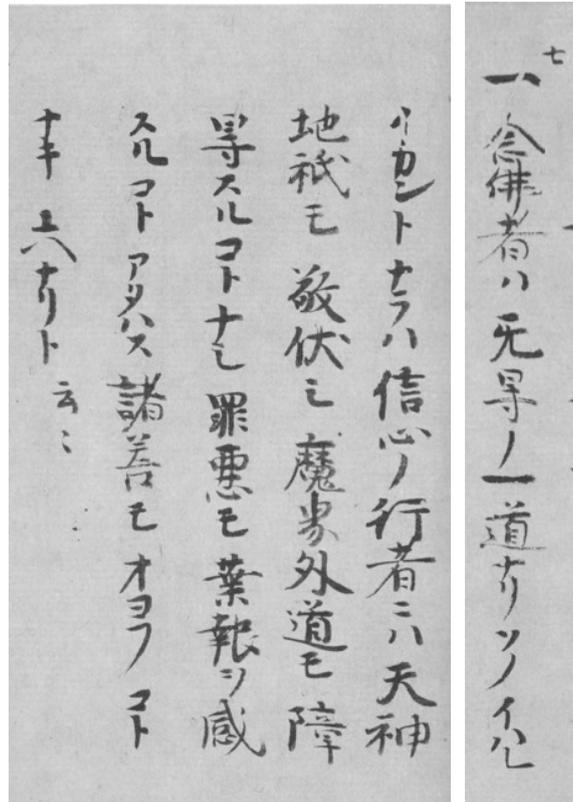
「『歎異抄』思想の解明」第IV期・第1回（通算第31回）

第七章——念仏者は無碍の一道

加来 雄之

ひとすじの、なむあみだぶつを、いただけば、
ひとすじみちに、まぎれなし。
なむあみだぶつを、みちずれに。（浅原才一）

迷う道は多いが、助かる道は唯の一筋よりないのや（物種吉兵衛）



七 念仏者は無碍ノ一道ナリ ソノイハレイカントナラハ 信心ノ行者ニハ 天神地祇
モ敬伏シ 魔界外道モ障碍スルコトナシ 罪悪モ業報ヲ感スルコトアタハス 諸善モ
オホフコトナキ ユヘナリト云々

【校異】ユヘナリ——ぬゆえに、無碍の一道なり

第七章	
<p>① ^セ一</p> <p>② 念仏者は無碍の一道なり。</p> <p>③ そのいはれいかんとならば、</p> <p>④ 信心の行者には、</p> <p>⑤ 天神地祇も敬伏し、</p> <p>⑥ 魔界外道も障碍することなし。</p> <p>⑦ 罪惡も業報を感ずることあたはず。</p> <p>⑧ 諸善もおよぶことなきゆへなり</p> <p>⑨ と云々</p>	<p>① (七) 一つ</p> <p>② 念仏〔する者は、〔なにもものにも〕妨げられることのないひとすじの道なのだ。</p> <p>③ その理由はどのようなことかというならば、</p> <p>④ 信心の行者には、</p> <p>⑤ 天の神や地の祇も敬意をはらってひれ伏し、</p> <p>⑥ 悪魔たちや〔仏教以〕外の異教の徒も妨げをすることはしない。</p> <p>⑦ 〔信心の行者には〕罪惡も業の報いを現わすことはできない。</p> <p>⑧ 〔また〕〔信心の行者には〕さまざまな善〔行〕も到達することがないからなのだ。</p> <p>⑨ と、〔親鸞聖人は〕仰いました。</p>

はじめに——「道としての往生」

① ^セ一

・『歎異抄』のなかで第七章はどのような位置をもっているのか。

師訓篇

安心訓 (第一章・第二章・第三章)

起行訓 利他 (第四章・第五章・第六章)

自利 (第七章・第八章・第九章)

・起行 (ただ念仏が実現する生活) おける利他 (他者との関係) についての訓え (第四・五・六章) から自利 (自身の歩み) についての訓え (第七・八・九章) への展開。

前章までの第四章・第五章・第六章では、念仏を慈悲の実践・親の供養および弟子と信者仲間の関係というような、他の人たちとの関係という観点から見たものでした。これらの章の主題は、自己の外部から起ってくるものといえましょう。しかし、第七章・第八章・第九章では、真実の信の人の心の状態のみならず、その人の生き方という内面を見ようとするものです。第七章は、信ずる人の究極の状態を簡潔にしかも深く述べたものです。

(A・ブルーム『現代思想と歎異抄』毎日新聞社、99頁)

・第七～九章の関係

「先師口伝の真信」が、念仏の行者（生活者）にどのような生の歩みを実現するのか、つまり自利ということについて聴講者の皆さまと共に学んでいくことができればと考えています。」（第IV期趣旨文）

【第七章の主題と構成】

・妙音院了祥『歎異抄聞記』

唯称無碍二

初、直示 …念仏者は、無碍の一道なり。

二、示由 二

初、衆障無碍 …そのいわれいかんとならば、信心の行者には、

神祇敬服 …天神地祇も敬伏し、

魔界不障 …魔界外道も障碍することなし。

業繫無索 …罪惡も業報も感ずることあたわず、

二、諸善無対 …諸善もおよぶことなきゆえに

・『歎異抄』のなかで第七章はどのような意味があるのか。第七章は一〇〇字にも満たないもつとも短い章だが、印象深い仰せである。

第一章の「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪もおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」という言葉の展開としてみることができよう。

② 念仏者は無碍の一道なり

- ・主要な諸本は「念仏者は」となっている。
- ・「念仏者は」か、「念仏は」か。

念仏者は無碍の一道なり、——文字の表面からいふと、この表現には一つの齟齬があるやうに見える。それは何であるかといへば、念仏者とは念仏する者、すなはち「人」である。さふして無碍の一道とはいふまでもなく「道」である。すなはち文章の主語が人であって、客語は道となつてゐる。そこで人は道なりといふことになる。これはどうもおかしいと怪しむ方があるかもしれない。……たとへ作者の筆が文法上から見て不用意に動いたとしても、その不用意の中に作者の魂の動きを見たいと思ふのである。……形の上よりも内面から深くものの奥を見る人は、「念仏者は無碍の一道なり」といふ表現の中に動いてゐる生きたいのちを発見されるであらう。それはなぜかといふに、およそ「道」といふものは「人」をのぞいては考へられぬものである。「道」は道に参与する人によつてはじめて「道」たり得るのである。同時に「人」は道に参与することのよつ

・「無碍の一道」

「無碍」について。

道は無碍道なり。『経（『華嚴経』）』にのたまわく、十方無碍人、一道より生死を出でたまえり。一道は無碍道なり。無碍とはいわく、生死即ちこれ涅槃なりと知るなり。

（曇鸞『論註』、『教行信証』行卷引用、『聖典』（第2版）215頁）

「帰命尽十方無碍光如来」ともうすは、帰命は南無。また帰命ともうすは、如来の勅命にしたがうところなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとするべしとなり。

（『尊号真像銘文』、『聖典』（第2版）643頁）

阿弥陀仏は智慧のひかりにておはしますなり。このひかりを無碍光仏と申すなり。無碍光と申すゆゑは、十方一切有情の悪業煩惱のところにさへられずへだてなきゆゑに、無碍とは申すなり。弥陀の光の不可思議にましますことをあらはしらせんとて、帰命尽十方無碍光如来とは申すなり。無碍光仏をつねにこころにかけ、となへたてまつれば、十方一切諸仏の徳をひとつに具したまふによりて弥陀を称すれば功德善根きはまりましまさぬゆゑに、龍樹菩薩は「我說彼尊功德事 衆善無辺如海水（我、彼の尊の功德を説くに 衆善無辺にして海水のごとし）（十二礼）とをしへたまへり。かるがゆゑに不可思議光仏と申すとみへたり。不可思議光仏のゆゑに「尽十方無碍光如来と申す」と、世親菩薩は『往生論』にあらはせり。」

（『弥陀如来名号徳』、『浄土真宗聖典』西本願寺、730頁）

「一道」について。

- ・『歎異抄』で「一」は特別の意味をもっている。
- ・『歎異抄』において「一道」のみならず「道」という表現が、仏道の意として用いられるのはここだけ。

「念仏者は無碍の一道なり」というおおせが親鸞の口から語りだされる情景はどのようなものであったのだろうか。そこには、神祇を恐れおおのきながら生きている人々がいた。そこには、魔界・外道に誘惑されている人々がいた。そこには、善悪に縛られて苦しんでいる人々がいた。そのような現実をふまえて、この親鸞の言葉は生まれてきたのではないか。

悲しみと喜びが交流する言葉として聞くべきではないだろうか。恐怖と不安と誘惑と責任感に押しつぶされそうな世界のなかで、無碍光如来の光明に照らされる利益にあずかるので

ある。

③ そのいわれいかんとならば、

・冒頭の一句をうけて、「そのいわれいかんとならば」と、「そのゆえは」などと比較しても、強い疑問の表現が続く。「いわれ」は、「(由来として) 言われていること」の意である。「いかん」は「いかに」の転で、「事がらの内容、状態、原因、理由などを疑い問う意を表わす。どのよう。どうであるか。どうか。」(『日本語句語大辞典』)の意。この表現は冒頭の主題が受けとめがたいことを物語っている。つまり「念仏は、無碍の一道なり」「念仏者は、無碍の一道をゆく者なり」などと分かりやすく解釈することは、かえって冒頭の句のもつ力を失うことになるかも知れない。

④ 信心の行者には

・なぜ④は、「念仏の行者には」ではなく、「信心の行者には」と表現するのか。

藤は「念仏の行者は必ずしも信心の行者ではないといふことになる。」(藤秀翠『講讃』第十一講の五)と指摘する。おそらく源空聖人の当時、さまざまな念仏者がいた。無碍の一道とされる「念仏者」は、「信心の行者」である。「信心の行者」という意味をもつ「念仏者」に実現する生を「無碍の一道」と呼ぶのであろう。

親鸞の「念仏者」とは、「ただ念仏」の仰せをかぶり、ただ信じて、生きる者という意味であろう。「信心の行者」とは、「選択本願の念仏を」信じてその行〔のはたらきのなか〕に生きる者(ひと)という意味であろう。

ただ本願他力の念仏さえあれば、地獄におちても後悔せずといえる者にとっては、人世のさまざまな問題や矛盾は、仏道を歩む碍りにはならないであろう。

・『歎異抄』第七章の構造(試案)

念仏者は	無碍の	一道なり
そのいわれいかんとならば		
信心の行者には	天神地祇も敬伏し 魔界外道も障碍することなし 罪惡も業報を感ずることあたわず	諸善もおよぶことなき ゆえなり
と云々(うんぬん)		